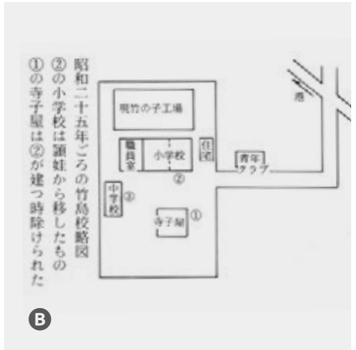
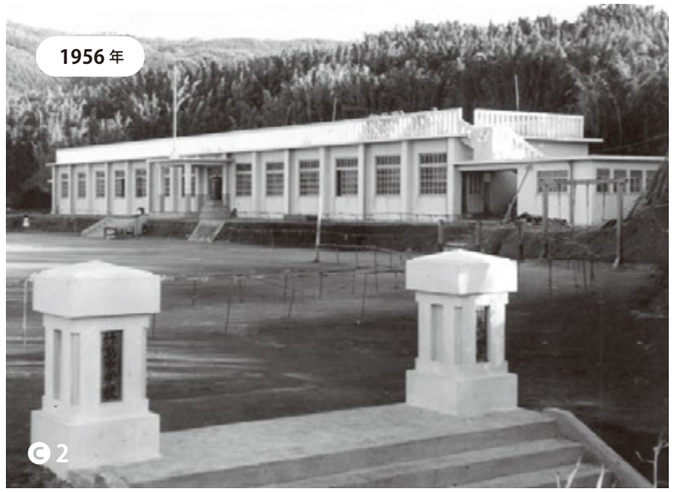




竹島

竹島の学校

本土より遅れること50年。三島村に本土並みの教育が始まったのは、世界恐慌の翌年の昭和5(1930)年だった。

藩政時代の竹島では、庄屋や神職の人らが文字を教えていた。明治には神職の家系だった安永善右衛門が、私塾を行う。明治28(1895)年に奄美大島の行政官、笹森儀助がトカラ視察でこの私塾を訪れている。『拾島状況録』の記録では、17名いる児童のうち2名と、青年5名が就学しており、いずれも文章は書けなかったという。

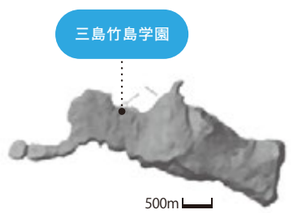
そして昭和5(1930)年、Ⓑ元寺子屋の建物を硫黄島尋常小学校竹島分校とする。Ⓐ昭和硫黄島噴火後の昭和9(1934)年には、その敷地に頴娃(えい)町の県の建物を移設して校舎にした。島民が費用と労働力を提供し、解体、運搬、整地まで人力で行い、島民総出で校舎を完成させた。

その7年後には戦争が始まり、爆撃で生徒が亡くなるなど辛い時代となる。米軍機を欺くために校舎の屋根に竹を被せたが、竹の根にいた白蟻が校舎を蝕んだ。危険なもろい校舎は、昭和30(1955)年の台風時に倒して役目を終えた。

Ⓒ現在の校舎も島民の協力による。土地は無償提供や土地の交換で確保。島民が無償で整地し、有償で建材を準備した。石は籠港から、砂は亀が産卵した長瀬海岸の砂地から(砂はとりつくした)、すべてカゴで運んだ。新校舎は、昭和31(1956)年に完成。Ⓓ島民の力を集めてできた校舎はいま、見晴らしの良い一等地にある。

思い出話

「ニガナは食用の野草ですが、島の人はウサギの餌と呼びます。昔、学校にいたウサギの餌だったので。」

竹島地区　40代　男性

4